



誦諧鑄

二十編



~ 5
1928
16



卷中產頌次序不同甲乙益

5
1928
16





木者菴

其角座 深川湖十

猪弱 なる屋一
 比名 名小
 水辺 山敷
 生熟 左俣
 神杖
 雲上ノ子
 黄色
 月花の白
 近江八条の白
 温泉の匂るとお
 しろー

初めハハ子堅れをハハ子堅の上
 法高ノ命厚とハハ子堅の堀の外
 終のハハ子堅もハハ子堅ハハ子堅
 短冊のハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 茶ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 春ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 二三回ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 寸ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 全ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 志ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 左ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 右ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 川ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅
 類ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅ハハ子堅



勢北素似をすゝ大和田の滝又
 関れ白洲れ晴い甚山
 揚屋昔も移も葉を毎了考
 祐直の愛も風子の宮
 中入屋の文字紙反よる山
 徳人か台へと物の名人
 治十の内裡ハ岸の此座
 宕虫袋や海川の君
 類一うむりしと移高より
 留よハ妻ぬ夏山の麻
 中うりこしと移鞍阿る此こ
 遊迎む世駒の耳よ風
 子孫よひとり原の大屎
 一の扇一先こちる乳
 羊よを物々字信の夜軍
 鞠坐の信極ておたそこ

悟月菴

付りてり才一和
 ふうき方之
 源氏物語
 け色く草
 ソ包初語
 古哥者り
 比喩 笑色
 一句事とをん
 中少子任立べし

深川春色

人の海居りひしう糸糸ゆく
 衣一をヲ戒の陣一布施
 欠く糸く強り壳の用ハれ
 舌止初れ人乃さし
 元政ウ枕のえり啼くうらら
 盛砂子牛れすたれのゆが文字
 いりぬ悟事れ尺ゆる態 藝
 二月二日風れ襖をさしとくさ
 色也酒歩もあ業子かるよま
 荻花や抱屋あれ粧牙子病
 露城もるうあされ子浩子く
 窓透や酢てと吞とさ心をち
 まのれく子何を待とく小筑城
 井子罵く雪を雪 二月堂

淡月夜
...
...

柳入小中子宇治の榮つて時
凱傳れ巻色三人交歌う
笑の臺子と女もく
雲と待 終業れ美田細
綾原の川子流に江戸中
灯子あま虫色覚への人れ念
陵 村 糸子子あまめ
夏州れくろ瓦る根煙 初
隅田堤 表れ念佛子なる極
年 四十集子とそハ漢後撰
初く 子んあまの舟れあ田之板
湯女もねよ小田系傳の雜兵ホ
日本れ息のうく 三 韓
句大れ孤の手くもあまれ
千竹の如残短人子香まられて
朝と伝頂面れ傾 城

黄花菴

神釈 和漢人名
各逸 山歌
草冥色 時色
風 護 菴
名小 武翁此
顔色 雲上の句
軍神おーしよし
めつーし季立
の句

深川永機

生本を曲て弓よ川 島
歩 身と南家木 枕
川 善の姿と時色く長堤
祿宜り 唾も風迄の宮
雲山も捨得も存る 建在寺
大橋へお強殿系侍豆おのこ
口れ中 迄 初日さく 郊
こまいうま地翁抱ぬて大駒言
又阿ま 憐れ 焚ける 息 招
阿男よ ちる 狭 枳り 息
羊よ 横 武さ 川
後き 舎人 雲隠とある
各色の 唯と退歩の 破 静
待 安れ 顔 臨の 園

資朝の由年ハ本ぬり初時
腰けけ又大入の後のうしろ向
余ののをせめてやする 持
持く交 持をこころを
孝一ツに 聖の武さし
芋の子ハ堀るほどを旅より
却隆の後を却て居る口
万のる遠く子くらゝ報
子のお孫くは鯉抱の足袋
流り医の玄夏の人も字治指迷
静 心よりよりよく 鎌倉
村子 子酒白の松とけけ
と川くつつまむ 芋の角
その日迄 語り書て 張れ
まし 子と共の子切て 蘇
等ハ 勤学堂は 来ても

犬長者

才二附わさる手
越しおのまをん
さくある一
句強弱交三
附よりまをん
くろく言高
句たる三福をり
ありてハ
んか
のす
空する

深川木髪

五禁酒 先教を女房の林
橋ハ八朔卯の志は
候年々 赤菫の家はね色夜
搦手ハ真輪大子ハ三谷堀
彦舟の候ハ二茶の
亥下ある君をくれハ形造也
けくまの孫ハ茶んせハ扇
二千九百九十九人ハ金
幸舟ハ海 善舟の首尾の
長瓶の洲ハ海日の一ツ
菱の石や橋ハ先虫 桃ハ脂
天神もんけける 妻の北
八 後石下ハ伴吹の千蓬

神祇 秋 意
古名 四季竹木
月旦志 賣色
山歌 生花 意
地名 三條
物を製スル業
子 納あり
附ありてハ好む
おもふ点
史くく人名上
片部

潤 窓

強弱交る
山歌
能事 樂器表
在 伴 古キ人名
関色 悠
六藝 何 何
拙お 古キ寺院の名

令と云人參五く補伏也
古義 坊すく 謹 州 甲 州
布 祇 州 肌 了 言 子 産 産
虫 の 喜 も 憂 裳 袋 あり 山 採
魚 と 化 して も ち 居 腸 ち ち 心
荒 務 を せ 周 乃 子 心
子 子 二 人 一 世 を ち ち 女
後 状 裂 て ち 係 ハ ち ち
子 ける 軍 の 糧 の 分 ち ち
竹 松 州 の 節 へ ち ち ち
平 氏 の 余 氏 橋 ち ち 福
浦 崎 ち ち 新 道 ち ち 好
陰 晴 一 日 皆 ち ち 足 袋
老 て ハ 意 悠 の 公 ち ち ち ち 役
一 夜 ハ 切 ち ち ち ち ち ち ち

深川 悠 稲

石立 二 丘 一 在 の 松 明 ち ち ち ち 山
堂 あり ち 魚 あり ち ち ち ち 所
公 家 流 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
情 勢 子 母 一 報 の ち ち ち ち
引 ける ち ち ち ち ち ち ち ち ち
一 ち 建 二 ち 建 又 山 ち ち ち ち
海 へ 入 ち 花 と ち ち ち ち ち ち
湯 舟 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
風 の 四 糸 を 戻 ち ち ち ち ち ち
此 忌 中 に 献 立 板 の 併 ち ち ち ち
此 公 の 糸 ち ち ち ち ち ち ち ち
是 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
衣 子 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
厚 帯 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

悟竹庵
神釈 武例
名所 地名
巽色
孫少し手植也
李ノ木ニシテ手植
た
る句

悟竹庵

深川簫下

梓弓佛も口を利 色く
鼻より上をわして 孫扇
られも大敵の禪 かな
守りよ 遊ん くり 先の玉
細代打 激も我ひの 跡
との 伶人も弓の歯の 疵
何肉通ひの 懐 不 笛
男ウ 打ち 怪 以 貝 若
そ 取 主 しく 八 ち 取 ね ず 賢
す 神 主 しく 八 ち 取 ね ず 賢
獲 一 つ く 袖 平 一 湖 三 の 本 加 じ
九 十 九 取 目 八 取 一 大 空
和 布 苜 的 謙 八 海 底 の 早
臨 守 の 聖 持 之 取 ね ず 賢
夕 了 此 文 字 を 反 又 八 取 一 山
萩 大 名 乃 怪 以 貝 若

神釈 武例
名所 地名
巽色
孫少し手植也
李ノ木ニシテ手植
た
る句

一石立
二文に 取の松ぬに ち しく 泣り山
湖に 灯の 尺 しく 大津の 夕 八 取 一
峭 臺に 原 八 の 管 屋の 破 訓 貝
大 破と 云 八 八 取 一 何 取 一 け 一 ぎ
似 城に 獨 常 一 さ せ しく 八 取 一 天 峯
禱 木に 菌 云 一 八 取 一 秋 の 音
む 手 捲 しく 流 しく 皮 も 瓜 の 音
味 唯 濂に け の 実 約 しく 八 取 一 糸
松に 嘆 敵 八 二 尺の 峭 の 足
四 十 八 しく 四 台 を 賣 八 取 一 八 取 一 八 取 一
給 曆 八 取 一 八 取 一 社 日 も 乙 ち の 給
風 八 取 一 八 取 一 八 取 一 八 取 一 八 取 一 八 取 一
左 活 玉 鳥 の 籠 も 今 取 一 八 取 一 八 取 一
雪 隠 も 流 れ て 流 一 八 取 一 八 取 一 八 取 一 八 取 一 八 取 一 八 取 一

雪山の宿も時々の破れ傘
踏歌の聖の塔のれと
其氣屋舟も鶴の櫓
九十九夜をさる風は簑
人かた起る素良は
羊も化し〜ハ夜越馬人出
け舟も水佛乃果
夕アの文字紙灰にるる山
さく〜と蘇坂の馬
一本吹く笛 奏は
掃一所弓掛の
と〜山を〜世 松の
年の波路新掃よる
院の纏に紙縞乃
于以書ハいうに遊人の後
の〜り〜と元日乃

善哉菴

三句後あ〜は
息〜は
六字南を
上州地名にけ
孫名 地籠岩
山名 籠石
孫名 地籠
水底、水底
水底
池名、井筒の
田〜く〜

晋子六世 観九窓老鼠

白立 後手此中〜ふちを耐留的
い〜孫の考や御松乃伽
今旭孫名此供市の地らら
その名変生男子南をあら
二り鴻〜を義理の子を育
養此位孫名を此〜水底
斤補袖〜 乃 乃 乃
米室屋〜 乃 乃 乃
余り能〜占と〜
而化粧此間ハ安〜
字此海〜乃の沙の恩
同きて〜はる秋乃七
アて〜川〜公夏ハ
松日此幣も祓祓の比松岩

ち竹筒(あ)を八
 口比(あ)を八
 三升上(あ)地名六
 何(あ)を八
 白眼(あ)
 是(あ)を八
 の(あ)を八
 ソ(あ)を八
 引(あ)を八
 笑(あ)を八
 弓(あ)を八
 於(あ)を八
 邪(あ)を八
 考(あ)を八

可来庵

強和(あ)を八
 了(あ)を八
 何(あ)を八
 神(あ)を八
 余(あ)を八
 尺(あ)を八

多(あ)を八
 播(あ)を八
 弱(あ)を八
 印(あ)を八
 這(あ)を八
 高(あ)を八
 板(あ)を八
 細(あ)を八
 女(あ)を八
 村(あ)を八
 我(あ)を八
 後(あ)を八
 才(あ)を八
 名(あ)を八
 村(あ)を八

贈答 畔 風 詠

あ(あ)を八
 弓(あ)を八
 仰(あ)を八
 瑤(あ)を八
 僕(あ)を八
 脊(あ)を八
 引(あ)を八
 了(あ)を八
 今(あ)を八
 體(あ)を八

土作りの破屋に在るは
 法の世や末を善慶と云ふも
 吾所の無窮とけはきりく
 歌よいさめる神の心
 学や古き軒の糸のち
 居ひく石里んぬ海乃尚昔
 ひさきこもるて歩け三味
 云の紫工付けて赤き古唄子
 嗚う海くす川わう売草首
 来やうも知れぬあ用の心
 雑兵ともう昔陣を位く
 雪限の外もあうき陸奥北茨
 一目よふき高山の雪
 國うの貢の支交ををく
 一歩の約束ハミを吹のかハ
 利於く好交の盤ハ竹木の上

麦且庵

中 泥牛

強和元一付日
 うり才一く
 神 在神
 山歌
 冥悟 坐
 比喩
 尺山 付余ハ
 下の句中尺
 合る

短冊の外ハ一衣の振奇ハ神
 渡橋の下を歩くも余は首
 五宝一投引うけの神遊ま
 い川をゆく捲られ扇作ぬ人
 輝きう時川をうきとんとの大
 振る子子飛浮の海山の木れ白
 樹の草葉めを中 麦 ぬ川
 藻屑文を吸付てり神遊をも
 虫の冠をうれハおるあう四
 切をれハ千架のそ何は猪の上
 夢うくく尾上乃 裸 産
 生玉を鐘のうきお相 系
 蒲雲をすうて留尺在る
 度ハ独桑を一本乃 枝

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like "三句", "系地名", and "風流人名".

浄土庵

三句の後に才二
系地名
風流人名
古子
古歌とく

芦時沁りおしり 燈もき
胡の人子を川うき 梳
米着うけて大名をとよ
兼後子むむ 甘も境木の葉を
粥のーかし午 妻めきり
虫谷のそ窓を川て唯光
改と焼てある 卷系う 謝
聖ハ歎の口のそーめそや
陰の勢古とあそくう 庇
連場へ入へる 室寺け 障
子新めきききき 障障る 障
連小便を 襦 袴 袴
被 袴 裂く ぬ 岡の 犬
りー 佛名の肩のそー雪
歩未と 雪ふ 破てーのぬ
雪隠も 焚ッ 袴ーて 障 障

茶 桃 宜

楯お 火も 非代のやーぬ 産所
魂 近るも 障 袴 のかー業
伏 入へ 恙く 雪 隠 を 雪
六 祖の 拂子 米 出 を 掃く
美石 公ハ 子 来く 居る
言 時く 金を 出 以 栄の 戸
ま 川と とも 途 ま 此 人
ま かる 癖 入 参る 松 島
死く 目 出 友 年 を 入 中 む
骨 得 ちくも 雪 の 上 人
仙 埃 ちくく 四 季 小 唄 菊
泥 坊 迹 入 母 の 海 息
佛 名 の 肩 小 ちー 挽 音 石

三井寺

中の是所ハ流ニ云
約(隻)の飼る桶も興出
桶ををなく去似る主生爲れ
日老の葵糸も糸一月を
出ろさしと牡丹の織を掃捨て
中川の宿り螢の鼻入り付
潤ハ流と糸越車の口の中
星崎の岨日千を待あろ
破色居口十八流の物産
侍中へ海交東の風来
尺ハ(う)のらるの目を眠り
三井寺好清も時ある松の下
沙妻や日毎に起る浮舟を
風の松の石より居所の城
云すりよ胞瘡并の跡をひ
垣は是是もあなめれりり

方圓庵

付りりり才一強
弱交る一
夏相名不
何を欲あは也
地名 江戸地名
つれづれの
大岡記の人名
夏色 日地名
意のうけを編む
枕とりの月志
又車のみ
菫塚のちり

江戸
談林派

寫

得器

ありとて園の世は如く 桶伏
我知を考く 嘯くく人たる
一強く余りく 乳のひや
儼よよ人羊も 逆りの美系
費子子子 子子子子子
養政の世も 全く二倍 子子子
飯時既 二子 子子 子子
腸の痛なる けと 是ハ人の面
あれくハ 大系の子子 子子
脊山をくく 子子 子子 子子
不破の美屋の 枕とりの月
一接し車 子子 子子 子子
とくくも 易く 宋 漢 乃 腮

ケイニ

代ふる尾
小金井一 玉川
能つり
言息六種ひさこ
尺々知るる

大圓氣

九洞菴

強弱交る下三句の
返り舟一子一甲
場和三角は子なる
白熱一陸々
融く尺舟を愛
化一舟舟を愛
点あり列子記
くわーくわー
をー
神釈 愆 世常
実法 忠義 人名

朝の月山のふりこはふる
朝の月の影 北風飛りこる
猿狩者をこころと涙の口車
光り者拙活も嵐も伸こ
蕨うのり待も結る狗あ
風をー形りこ推し
社の虫風も玉よゆら
今夕人といふーるの也ー
花ハ根と戻る心死人も骨
懐ー人供 舟中習
かへん張らぬ人よる年と知
二ハ作 照陰り乃
出陳通く賃屋味
文車の下つこよ 細見
折ハみとと鼻ハ柄 送

伊藤清器

前白木夕松りガー残りし朝此月
舞 春新しき子 言子 鈴 香
此か子ー馬れ学所 喰ふ香
卯代茶も降一也 佐野ー夕乃香
源流の船一情ヶれ 貫ひ飯
内府ののり張云 月ぬ日ハれ
仙酔をぬれハ句生 梓 細
君ハセヤ ス大 塔 の 家
まよるハハリよて 名 昏れハ 和 香
甲教り 止れハ 竹 籠 鞠
おげり ぬれハ 手 子 狗 明
乳の目見ハの 眞と 香 也
新々花山の 眞と 香 也
信ガ 信 一 扱 の 蚕

弓馬 軍神 勝軍
 山類 高山
 極物 別ニ極松橋井
 病神 看病加
 飯沼 事 日人名
 買色 日人名
 目か及句 例ニ異進ニ
 地名 列ニ極磨
 生乳
 主役 師才 親子
 兄弟 惟合 句も点
 あり

系婦人

付了り予一
 強弱 交り予一
 鼓 琴
 神田地名
 軍の予 人名
 月むす
 めの信 買色
 更向の予

系向も信養もくふれ降つてき
 鼓石もむは信養の積こ指
 系懐より陽信けく然いと好む
 系懐五つて玉地結強引
 生牌一するくと流く初から
 才ふハ六ば信好凡の危塊
 後實もいと方子む考け風
 燃一ても炭よりするぬ流丸木
 火くと残りて体一朝の月
 尸拾よて竹新注し
 空の寺屋ともきりい五乃時
 系より書と文章好もて清以
 育とを好もあさり初らう小
 君さききりハ信城之実
 一生小庚り一月るは慶斗
 あり

得兆

正月の中よりこぞれむきと那
 お妻のおしら禿のたすむかり
 帆は明る御又着る後中し
 並土子小妻すの瓜中し
 考ハ居ぬ紫又さ此形日射
 考は明り形りの月と長し
 考は娘の虫はあつあつと考
 指の軍人んく居る下性小
 信の信と相るの及女知し
 信友の葉するふハ派小をお好
 此小枝をみるると尾を振翁丸
 極光一這し子に琴を花歌し
 右皮目の緒を歌し中し志を
 くく皮をたうとるめる長の上

淡和交り一
附り下り一
依玉地名名不
江戸地名
年甲の
少北 水邊
杰 愛色
寺名
先つしき極抱
余ハ下ニ若白
又舎ベ
十九編ノ下止

古極庵

あや花の葉のざんくハ石
手枕の内をよしの山
、荊茅茂る大屋此の口
、蓑虫の啼きも父と母の底
、透らるる節を怪は味一ツ
、うらうら瓶の底を産の下
、こらら瓶の底を産の下
裂キ著は巻き山の本れ白ひ
、城と何れも惚られ中
、香花の庵くるりも石佛
、あも今も小群の侍兵
、おのれをの死はなつつく
、神石の町もむの安しこ
、号ハ老啼一 四月 初日

島蘭系乃

京町の及甫一も出らまの猫
系干一帝ハソも人う
榮彦尼身く拓く若哉
遠く人の抱く二人係る
虎切考公家乃 位立
母と母とがあ産の伽
夕アの留ちハ知る居る親
豆ハ降くぬを辛味の両
下は揚やのやをたす
九千五本の匠一とぬ
たし以る尾は海産の相
手足をもきよふとま名物
琴丸おろり落る文車
抄子むら箱王がた
皿はす中江寺の証

あや花の葉のざんくハ石
手枕の内をよしの山
、荊茅茂る大屋此の口
、蓑虫の啼きも父と母の底
、透らるる節を怪は味一ツ
、うらうら瓶の底を産の下
、こらら瓶の底を産の下
裂キ著は巻き山の本れ白ひ
、城と何れも惚られ中
、香花の庵くるりも石佛
、あも今も小群の侍兵
、おのれをの死はなつつく
、神石の町もむの安しこ
、号ハ老啼一 四月 初日

日わく 庵 土ハ只廣いのこ
 孫ぬりのハ我と傳と神打
 来ぬ 東の 知とむく扱ふ
 軍 五ル世は梅扇餅の袴
 志川むくくと空ふ紫ぢぬ舟
 ちるをよさうく尾上のむく鳥
 月より糸は雪のむく
 すくきをむくさハ極樂
 一文く鶏のそく言の西夢ひ
 五落くくも和他のるる弓
 下画ハ足はさくむ乳山
 足くハ裂瀆奇の泣れ落くみ
 梢く軍足く居る性ホ
 橋落ハ大河の上も樹の系
 岩

幽松庵

生 李岱

付三句目より一
 弓馬
 京大坂地名
 東海左
 約事
 釈 云左松お
 沈川 罌を
 強弱もす

前句 裾ハ露小禱ハ必の草野系
 明くれも地松松松
 立も立られぬ不無の席
 出す箱は列 わ手りある
 時の来ておれえ孫もれとの去
 ア、男入禱をさる書も去
 常 幽解て休 活のせ活
 ちつちり明く波あ音
 算樹もあけての上ハ好ありて
 禁火をすく網代守る人
 風はぬぐく吹くれて松系
 二石明れも渡く伽羅の香
 後 係は隠ハ佛の日もろく

三十一

喟花庵

三句のくさくさ一
 巻のくさくさ一
 流跡交るくさくさ一
 のくさくさくさくさ
 やくさくさくさくさ
 袂袂 山衣
 衣色 植物
 附心むつろくさくさ
 先
 寂く

組 庭 浦 蔭 桑 の 上 子 好 の 衣
 鶴 を 離 れ し お と 志 ころ ち
 霧 の 白 毛 を 吹 分 れ 風
 笛 子 奏 ぬ 麻 う た う む の 足
 あ れ う 女 を 疎 端 の 石
 女 乃 禱 立 時 へ 踏 ぬ
 友 の 日 を 夢 へ 言 ぬ 蓮 の 毛
 疎 家 の 濁 を 蜻 へ 欠 ぬ
 待 宵 ぬ 長 待 ち ぬ 宵 づ ぬ
 柿 食 ぬ 娘 づ ぬ ころ ぬ
 彩 遣 ぬ 八 彩 弓 壳 八 夜 ぬ
 佃 う ぬ 十 五 童 子 の む ぎ 身 賣
 喜 の 衣 乃 夢 牛 け ち ぬ 時 正 ぬ
 俗 子 を ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 花 石 の 你 ぬ 廓 の 女 帛 志
 新 し ぬ 附 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

俳道人能阿

あ け 札 場 の あ け け け け け
 虚 せ 傳 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 祝 日 の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 末 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 三 玉 の 別 色 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 夢 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 夫 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 山 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 山 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 夫 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

御作

ころろ若きお織の涙ひまれ風
 泣なく賣れる梅のまきく紀
 君を戻した跡乃秋風
 翠芦の縁うわさかきそとよめとき
 時面くくす房の拍さし
 袖味重の香よこころうさる夕露系
 ゆよ沙のうらみ見ゆる春の海
 市師の馳走の駕り咲花
 系も風台も色かおあ乃末
 さき常や摩石も時枕
 娘り孫らるる春とさうも免
 裾裾の田井へうはるねもあけ
 虫さくぬ小娘の糸のたけつら
 木の實時あるる斎乃宮
 神と尺形ハ消へ霧の中
 朝戸のまわりさるる

松 齋

立南座 關 立志

強弱文(一)

神祇 炎色

水色 江の号

鎌倉 金沢北地名

伊豆 相模

温泉 ぬる

才一の号 五八尺た

一からさ句は味

心を付下

古人云 後点の心お

あり十五篇、言く

公で月前々を略す

一カ之

出〜て来る 碁盤の上子花の鏡

原まき〜の織立 病へ医者

衝すく〜を引 号〜ぬ 扱の初

曉傘 小目の 覚ぬ 顔

〜れて 巻子 泥坊の 知恵

め房 叱つて 不自由〜て 居る

建場〜て すす、 舎り 木を 見る

送り 大の 障り け〜と 祀焚ゆり

油 賣 籠の 巢 籠 葉 抄

抄〜 拍 笈 白 煙の 先へ 出て

袋の 鞆 むく ち〜 不〜 おん

二〜 目ハ 居る〜を 表〜 専〜

専 破り 志 三 居 撲の 舌

大 破〜 一〜 小 破の む〜 付 面

（）

まけよの面を浴ら楊根むき
りんきん子あそびをきく食好
後研ふとろく人の日
磨子あそびをきく換
精めたのこつ子坊子改つ居以
くまぬ鏡をきよ降を日
終年一の長ハ旅立のまうら
見うけをゆ。小泉乃
三ッ段へくそくらの後儀鬼舟
左方々漫子あ。庭の石
壺てハ文子賀の浦波
奈の接ま解く旅の持よ
村あて修りつをくあそび者
ゆれゆと水のとすぬ朝鹽
意減るあちへ泥坊
風の吹ぬく

梢月庵

強弱
付
神祇 山歌
旅神
人名
余ハ著ん句を
見合へ

関立儿

前白符あのもくれ小際も舞乃補
能也々眼子振淋一
二一く着の当る神
門の戸子杖才と控る篇町
一に年もまき幸氏うささき
氣も入ととと打く仲人
月もゆりうさの花乃其風
千羽のゆら良子ニ子比ねる
一後笑ハ虫とま啼ぬその月
土平 稻妻胞衣平元了旅
一伊豆海の汗も拭く汗ま
不二とトリく本の六月
むくのり とかま虫干
澄若く 笑もせぬ世と成りる危

Handwritten notes in the top right section, including the characters '蘇民風'.

雑齋

強弱交るへー
三夕の月より第一
射、ようてきまよ
おる
ほりく竹いす
江戸地名 雑の白
流本流の白今う
季立の内めつと
うま
風雅年人名
古今集撰者の名

幼介り使者より勇ま羅子
右三寸、と人の手れりの
正形、買せぬ菜の洗ひ立
原の、今日と狗子忘れす
さくく、と手鞋子揃る君の考
居酒、日小判、義士れ、勢ひ
妻、お欠、こ子着、ひ、是、見、せ
婿、一、身、やむ、し、の、人、身、考
牛、の、日、除、子、少、一、持、風
テニカンのむり、く、起、く、ふ、笑、ひ
箱、牙、ハ、又、控、く、ま、ぬ、忍、り、ろ、ろ
ら、ひ、嘉、例、の、殊、乃、手、傳
人、債、の、人、ま、ん、ち、と、教、徳、す
所、階、子、着、れ、く、む、南、廻
向、よ、足、踏、く、唯、く、り、を、待、ッ
首、子、是、を、あ、か、九、十、川

關 雪志

前、白、あ、れ、と、つく、障、う、ま、し、也、ろ
鼻、を、た、と、く、て、身、の、取、れ、り
さ、し、向、よ、且、夕、ア、の、つ、と、め、証
人、は、果、あ、り、露、よ、く、そ、た、り
雅、な、す、芦、は、所、後、す、ろ、ろ、り
風、と、吹、ま、り、り、を、妻、の、風
役、の、古、い、れ、良、あ、く
食、も、も、や、ハ、お、れ、火、打、お
為、武、者、の、禮、の、糸、も、き、り、く、ひ
お、も、ら、の、底、り、足、へ、て、家、の、ど、く
内、草、鞋、百、く、順、の、家、入
辛、皮、は、志、ろ、く、涼、き、古、の上
右、の、地、も、ろ、の、秀、志
双、六、は、あ、り、て、あ、を、妻、の、骨

實毛ハ古き抱女
の名す
ハ赤下ニあり
そはと見え合

窓瓢坊

付方乃言味三合子
しるさかりるる子
赤ここれ替り赤一
る判あり於る句三
物さきとよみせ
活るひ男かろく
仕立一おろも
しそとある
ももたれとも
たすん升つちるまを
た子志る必も
刺しつるあは

、穠繩をふり叩て新野の身
、佛の所名は路よ我口
、義理とハいとふ理子縁流
、風吹けて列る物を考番ひ
、是より一ツ叶ハは家なる
、赤子の入身をけりく突く
、中よも考の言ハ長
、脱く附の性くつるか一は足
、沼川ハ風雅をわく一とい
、是ハ焼北て一人は赤志士
、てらちんを足れ枕と同一紋
、喜田の陸ゆか、赤群ト
、靨是たとすむまのおろ一庇
、赤あの不無立ッ志なり
、川の向ふをあつる言、群
、太の屎足ハ斬しは控

関白志

前句 青田より風吹送るる後涼
、大門か、ハ水たの事てな
、人の上を、叶ハ六年の事
、赤子の入身をそとく、突
、能ハ連同士旅乃赤一、
、日の本や海系の坊の火、
、らよもハ内暑盤り一、
、立圍、例乃粘板、
、佛、佛も佛を連、大名
、風呂ハ入名佛、も出、
、三、流もうる、も、
、肥立、係を、食を、
、清乃、外物、為、
、勢、玉、丸、糸、
、鞋、さ、く、

クイニ

神釈

神釈はかきもきり
買色なる意は
此山の清き白
人名も元孫喜子
保乃此の風流なる
名お此名を中世の
在体の閑情武士
めさしとくをさる
海へ古き軍作

、縁 耳れー 咄さゆー
、豆も 核 夜も宿てむー 乃核
、薬玉乃 五色の扇の娘も秀く
三ツ 枕々 佳 筆 々 園
、油 賣 及 流の亦も様々け
、塚子 残りー 夕顔 乃 岩
、大 根子 与と 舟ー くら 若
、燈 明も 合 兼も 女と 喜 其 乳 山
、晴 幸々 塵 又 行 心 ぬ 人 也 乃
、流 訪 日 伴 乃 千 藤 此 の 文
、見 ぬ 介 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
、人 の 振 々 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
、大 門 寺 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
、省 病 の 咄 珍 乃 乃 乃 乃 乃 乃
、此 乃 山 是 日 本 乃 乃 乃 乃 乃
、赤 坂 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

満足庵

附りてくすくす
神釈 あき
極中のよ
意の二々目
柳あり
一句子よ川て
点あれハ
ハよハ
お定ハ
と

乾什派 岩本乾什

あや主後ハ
野と斗ハ
傳の
米上子
出齋招ハ
ハハ
仙山ハ
表向情ハ
味方ハ
廣蓋子ハ
族の大極上ハ
海ハ

〇
イ
ニ

一ノイニ

梅こまのたてし
藍のま 柑れ
常陸常外枝次郎の板
粉と対
祇園と今并の名
こまやま系の子
不伝田此奏 北活其奈
まねと係 粉の菓
ま 粉まーまよま系
いろく及々記とまも
附りありき八五
り子家と知は拍字
たてを只附りり
才一

鷺鳥谷隣

強弱まろ下附三石
後り才一有り
十九編おみ習家
り有り 熱作見
しる句
住吉れり 鷺 香
蛇 祇園 常
買色 思也
葛原此名何
し
田畑魚作在伴別

新編

、碎ときり人々自惚る
、積の面はあひうら燈火の灰
、晴子うら面は差さるゆき
、皆弱さうら官軍の弓
、まを幸ひまよとめ係 僧
、風呂吹二二本ぬらうら大根
、その氣二千千里此外もをが
、系り下りまゆ中な伸ぶら馬
、第一目の結平あよて又徳寺
、茶字の寄り樂焼乃土
、片里は竹取石の松ま
、まとはうらまは氷千町田
、西方花年一 馳走の
、海靜飯章 突のま 正
、まめさ、ちあら氷千町田
、家君のうらまは

羽根吳丈

まこれの中は地系の子
、高き高ありともとよ升の皮
、神示はまよく四社の苗代
、船唄うとも室の 葵 情
、蛇の末や子子の傍墓所淋
、鷹の付裂さまをぬら
、和晴の海と田は通ら
、ゆくれれれれれれれれれ
、行 七日 既香れ外は犬お着
、一寸 毛虫をまら 本 後
、五 紙へ志うれ通 葉の公 朋
、中 枕はまをす 雜 孝 色
、左 山花のなれ白く入梅
、佐 吉の田田から海へる

あきこ 氷室
柱の虫熱作のつ
くくん作しつら
白多抱あり

淡路交る魚
名不地名の内別
近小地名
東海道 中山道
地名 西条水
神歌 在体
軍体
名号さ女人名
知名人名ハ
雲上めきしる
水辺 生れ
深情 兼

邨沈菴

泥紋の色を拵しつら紙 蚕
丸合相雪歩 拂し袖も
あふこ鏡火を 東風は任せ
田長々啼て居て賣るる
青の影を 追て控山へ
糸出まるとハ 杯に川あい誘
市電の松も 枝振りと
一羽啼 樹に うれて
言野と 斗 顔も
米とく あり毛和 奇の
飾 葉は 星中 日
揚屋は さらも 葉を
象 臥の 磯 歩揚
氷室通 一 雲の子
雨乞の 日 神 前
蔓川 けたぬら び

山石本英道

前白 昇乃は方子人志
蔚明く又小妻れ 脊戸の
下早く居る 考藤本
青盤 石交り 砂子
海魚ハ 稀を 忌七日
子 あり 骨 柳の
塩 繭も 六 糸 乃 市
物 侘 室北ハ 崎の夕
車 舎り 梶の 舟
乳 島も 熊胆も 手
熱 燭乃 小 志
乳 守乃 古 瓶
天 狗 珠乃 舟 舟 石

○ケイ...

又 桂島の
付外何よりも附
日より此種振を
ハ高島より一体
少くも白強き方
なり

（Faint background text)

惟徳齋

強弱を云々三句
の月より此種何と
定するより是を
りれども
京都 瑞倉此地名
桂島の 旅伴
云々け
うけ合
又おうしと云々
又考ふる句もよ
し一志の二句めい
ん付くし

奇に才を疑る 摩戔の侘住
月々青 暮子ハ望もあるものを
物乃乃司の人知らぬ 勞
土修日記ハ兼真孫のりハ言ハ
、鼎 破れハ子軍ハモヤトト 浩
名馬ノノ 麻乃 弘の第 痺
、云々此くの云々紫通辞のりハ
降 糸さ百も 城乃 嚴 重
、年 考 あり 氏十 あり 神の
罪 後乃 田ノノ 矢の 根 堀 出
、色 敷の 志 ざく ぎく 屋 下
卒 於 婆 小 町 を 吼く 表 犬
、片ノノ 是乃 陣ノノ 飛ノノ
稻 妻 也 悟 色ノノ 坐 禪 窟
、鶴 考 目 あり 子 引ノノ 尚 弓
對 照 也 於 子 子 子ノノ 男 泣

仲 是 輔

前ハ 秋ハ 深ニノノ 池 切ノノ
木 敷 子 守 符 子 枝 村 五 葉
、子 在 此 署 子 氣 子 孫 ぬ 縁
未 形 子 宮 居 子 代 子 霧 子 窓
、風 入 子 占 子 記 日 本 記 云 々
、蓮ノノ 心 む 星 花 山 信
、雲 子 子 子 訓 ねハ 丸 出 車 ぬ 丸
許 六 見 子 ける 宇 於 山 乃 秋
、怪 屋 未 熟ノノ 動ノノ 魂
松 尾 子 録 波 子 古 我 坊
、故 此 名 子 子 子 子 子 子 子
、各 精 子 耳ノノ 奴 子 子 子 子
、一 氣 子 眠 氣 子 子 子 子 子 子
建 場 子 柵 子 子 子 子 子 子 子

有装琳（くちり）掛人
 油子てぬつ登（坊を）五途一
 秋の日にと彫りの大工鑿研て
 柳の類散跡（色）
 夏より岩戸紫乃山
 骨更て早堂（二）雲北木賃宿
 鶯々鳴ても来（さ）言き月の軌
 燃りて函谷冥子常（一）考
 添石大丈の年（成）別
 玉拂笥二見れ松の言（有）繪
 ころ麻と云れく（差）六十
 人心紙衣も並す衣（伎）坂
 縁をさ二十の坂を（や）てり
 飛頭雲の母衣（堀）一（溜）
 夏（一）佛子（法）白髪
 除衣子（整）て（花）香（一）葉

青牛舎

裏雪左

強弱交る（一）
 付りてり（一）
 元結（こ）
 節季（い）
 誇草 砧
 買入 立休
 水車
 かるま（句）
 おう（一）

（一）人子人夏の汗（の）草相撲
 唯一味号（ぬ）秘糸の（か）て
 風風を様（の）教（せ）一松の志
 松風の声を（さ）て（て）節季（い）
 妻の風涼（さ）け（れ）の香（を）吸（ひ）て
 一系（へ）雪（を）紙（の）紙（を）紙
 液の柄（は）能（く）も並（ん）て赤陸塔
 永（さ）日（を）と（つ）信（一）く（ま）り（え）結（こ）き
 表前や社（む）る（ま）の（原）形（を）
 元結（こ）く（才）の（さ）う（ま）り（り）
 後（夕）日の（葉）こ（ほ）れ（め）
 露（を）水晶（の）誇（草）乃（を）
 齒（て）乃（を）買（入）流（戸）の（一）玉

山崎

空随菴

空随菴

和りなる方三句
の法一なり
れ二句めん
言点わり
江の竹籾倉の地名
柿鷹牛
令と云句
極拘子忠
尺云
大山地名

矢をうらむる
山を荒て夏のころ
徳利阿のなすく祝船の柳
柔く旭色花の頂
水車 是うら西ハ勢の急
湯屋の二階より宗匠
目代のつま上下は角上ありて
幸手宿よもる尾層
おりのろく突の居るの御車
松ハ隠居いして中文司
やつたり無口女郎かつても
明庭へさうくとごぼれ帝季の
土弓場て知ぬものなりた鼓科子
とのほとくは講義の
行へ松子をつけて 鏡
本久てありさふれ花久

大塚花伯

白立
鴉賣子あつて
日商り子千飯のぬき道明寺
鍋の敷くははきもきりて
長堤夕ア淋しき雨の牛
ちかき女の前は沙汰をして
芦粽 籾波の叔母へ片た
歯のぬけはわろりと相一葉
織履ハ様々鳴て梅
観瓶のおんて通れ二尺の
宜尺連ころぬお中の中
看病のうけて茶後のさか
千両の封は鉄櫃五寸
土瓶の俵 玉時
風もぬきぬき金

三句はワラオ一
て居るは我
因静なる句は
在約多由の句
白痴なり

一 爐 菴

三句はワラオ一
て居るは我
因静なる句は
在約多由の句
白痴なり

おほの隠し子多き、お風
子多し中子金比羅の神酒
御んおき、清き、由美向の飯
房系の中子、隆の板、跨、景
曲つ、墨、張、引、と、摺、
傘、の、折、目、一、き、爪、揃、
あ、かけ、色、以、修、燐、の、梅
枝、子、の、新、く、提、灯、の、降、
妻、こ、こ、く、居、て、らん、鷹
眼、いて、尺、く、き、樂、焼、の、竈
日和、尺、と、千、又、飯、う、飯、枝
て、ね、荷、と、揚、と、寄、子、立、合
郊、の、花、ま、う、き、葬、礼、の、門
依、乳、を、え、を、毛、附、の、刃、う、
岩、本、院、の、土、間、を、這、し、蟹
加、持、清、る、子、の、係、り、と、や、く

九 子 本 端

前々 守山修名 東風のとよく
お梅の蒼こほく 義山
、考ハ、居ぬくと、明、れ、行、れ、戸
、窓、く、柳、あ、り、和、く、
、こ、の、の、一、里、ハ、長、て、二、月、と
、霞、む、日、の、沖、又、散、る、志、帆、行、帆
、砂、地、家、藤、又、砂、瓦、筆、目
、お、風、の、病、戸、使、新、又、新、葱
、何、お、う、う、う、涼、ハ、風、の、あ、り、
、曇、を、く、く、と、ゆ、小、秋、の、許
、新、く、出、又、落、方、乃、月
、風、の、あ、り、小、町、の、塚、の、花、房
、あ、り、新、く、風、の、新、く、桐、一、葉
、月、の、秋、子、伏、菜、の、か、笑

秋風きく雪く清の音
 草の露落る小橋の物影
 葉つる清のやうに
 淋しき八幡守の杖の材時名
 淋しき形の時行時
 漂杭をくみぬ越す波は
 水舟より高く舞い陰云
 寒りの方へ娘は行氣なり
 氣を長く生れ付て人の徳
 仏の事ハ笑ひよ
 病のちるを杖柱とも
 行糸の泡をぬきて憂き命
 小舟のつてく並木の船内
 松皮舟を飛ぶかきよきのま
 祝言は禪の何よのりくと
 坂も焼すけり来つけり牛

對鷗函

すき川勿論
 すくて地名
 親善の豊
 夕日の富士
 朝日れつく波
 袋工 瓦煙
 三石舟 葉が橋工
 さくら 梅 堂
 巨柳 らもめ
 おくし 買色
 枕ごとく

菴崎和禪

五月を名にすれりすき川
 瓦の美人名梅よりうらみす
 林の月光より裸よりうらみす
 親善の一人目より三石舟
 あらうのち目とほめぬ四巻
 三味せんり木魚のすき弘福寺
 起情うくけと故を喰てけり
 喜柳や梅口の丸の糸より
 塚眉をむとむ障子の穴の大一
 日とくれぬちやあきまの口より
 親善の豊のころより
 ほととぎす
 いとよとけりて妻をりこされ梅屋
 留子うけりてく田くの女より

房納少、ひ合
弓、一、一

成化坊

まぐく句の仕立、
より、揚ひか
付三句の、
を、一、
や、
梅、
系、
神、
切、

ま、
袋、
髪、
制、
月、
秋、
さ、
と、
あ、
す、
山、
机、
銭、
酒、
る、

平林文器

神、
傘、
の、
妻、
首、
梅、
神、
院、
足、
胡、
研、
梅、

浪のよろりや憂乃賣る中
人々起りあはれおろし
納し澆のわたりすく
才子の入り方と不りく突
憂の中も憂を憂 不惑
切火のひらゆる除夜のほほり
海客を離れ細の境 梅
友をの悠々といふ并糸堂
坪四の後家を日待し備りよ
かちちやせりし海 茅う糸山寺
宇はの山又越ゆきを梅の西
澆の精とる 様のりつふ
さす 棹の系も白と梅は川
岸 雪子馬の内侍の拱く
とりの雪 梅も中法をりけ
えの骨子りりるも中

高松菴

和らるる或うとく
雨後り勿海之
甲州地名 憂乃賣る
和らるる在作
鴨 雛子 多鶴
鴨 鴨
冥 悠 温 美 あり
和らるる
右平記のり
流 珍 子 の 中
雪山元政
身 正 記 也

鶴 白 眠

私るや或か茂乃并 山亭 梅
東の雪り油 氷りて 雪ちりり
悠 然 せ 風 と 光 りて 蒸り
日 合 越 友 雪 乃 雪 葉
鳥 息 や 折 の 羽 振 志 未 く 上
風 薫り 蕪 の 揚 屋 の 雪 冬
流 け ぬ の 末 左 莖 乃 小 船 渡
風 吹 れて 雪 も 一 万 氷 ち せ
風 入 れ 不 刀 に 一 万 氷 ち せ
雪 や た 茂 長 海 乃 雪 乃 灰
雪 子 れ や 帆 振 雪 乃 雪 乃 灰
出 帆 入 帆 舟 乃 雪 乃 雪 乃 灰
雪 乃 山 乃 雪 乃 雪 乃 雪 乃 灰
雪 乃 頭 乃 雪 乃 雪 乃 雪 乃 灰

山外菴

菱子極吉也内裡の形を
 娘子の持場なり時政うす
 廓も品町の町乃元日
 ちくちくゆりりりる物く
 母 城後子所 持乃伽
 能の志上り飛汗の幣
 山し 持よてと 赤方の浦在
 母 不才 秀一の七字 写り
 坂 赤右 銚り 浪立ッ
 七 甲 人 漢り 文知りぬ 遊
 谷 七 心 入り 桑山子 林 友
 松 牙 不 才 白川 一の 笑
 切 友 秀 よて 四社の 早し 女
 才 或 尼 又 けく 登連の 義
 我 才 赤 入 追 煩悩の 犬

松林菴

附了り示一
 て強弱交する
 清き白く
 秋 意
 人情の句
 必若 病体
 四季の草花
 賣色
 船と云々
 周易の句
 艸と云々

園 秀億

各 弟子 幾 妻 於 於 於 於 於
 秀 才 の 尾 端 け け 墓 の 控
 心をこめく 灰へ 子 習い
 依 吹 飛り 儀 業 の 灘
 梅 ちる 門子 心 易を 忘る
 親 法の 眼 子 心 易を 忘る
 妻 も や 夢 所 の 蒲 の 白ひ
 齋 子 ちる 追 男 尼 送 奴
 他人の 秋乃 子 心 易を 忘る
 今 子 累 冬 子 心 易を 忘る
 伯父 甥 の 田子 夕 立の 分け 備て
 拾 よて 清き 友 子 の 洗 拒
 米 育さ 男 子 何 系 の 胤
 田 一 妻 尼 子 夫 婦 子 心 易を 忘る

〇 雑記

〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記
〇 雑記

其の勞れの色よくとぼる
乾坤の外ハ大悟の眼も中人
糸熱や硯石とらる 洒 翰
炎一さも心子んまさ夫婦中
先達のひよりハあさくハ陰
討一敵の忌日 昂一よ
一壽ハ高き夢中の華雲雀
極熱や熱子病のまをんや
算の岨 根一妻の急葛
詞作き不定 ぐく 麻衣下り
さすの女 郎も病根ハ合
世海の只 見て清一松一本
云 孤子 顔を死しく 賢 情
係 藤ハ 稀子 孤 糸の 妻
水ハ子 枯 枝ハ 嘆て 字一 お
角 世 子 家 子 本 人 秋 未

方堂側松守方堂

付はあしきも
しきもよじ
おこしあき
しき
ひゆ 教伐と婦子
尺の 移しき
ふし
左折 病体 を
実法 宗姑 おし
手く 所あ 通よか
る事か
一勾の 仕して 雅俗

前々 若くはのしあしきまの山あえ
法理の 考よ 百さすを吹る
、腹心 ひらり 連く なまを
内く ち妹 うりなることと海り山
、挿子 子 風の さらる 学 毒
、天竺 と 葉を 養ふりの 葉は 備て
、骨は ひいやり 鑿の 砥らり
下さ まり 毒お 中けり 毒を
、何れ も 考し 門の 小流 せ
、藤お して 胡麻の 交り 報村 米
、あしり 林し 木蓮 花 かく
、葉お して 強ち して 三文 繪
、貝吹 立く 若い 山 ぶ
油の 高枕 を 嬉し 病あり

作りてし

ふえを日和に合もさるを妙法
信女ハハすく 野 此あし
右すてハニ正ある乃のきうれて
善き世を先んらる 六月の
花ゆみちる愛世とんむておうて
琵琶 抱外は杖の伽もた
おをすくは月もんらる下屋
きくのうしうは様色波音
上下く来て信るき
百姓の家抱をりよ花の春
産を吐く 及吐の介抱
さう置の丸敷くして月の草
すおの程の草すくあ
振側、田樂火所招許や
許ををりて路ておすり

硯海士

強弱たりて何とよ
好ももをしきうひ
もろし三句の後と附
才三三句の附おれ
をきくしこあ
ゆれも二句おもしろ
とも点低し附八遠
むらぐと拙とくミ
て附了又ん新た
附もつけれとあな
附へうん二句の仕立
いふもんをけりて
く借へ
のふん場の裡ま
二句目の態の扱ふ

映堂木彩

浦千鳥ひれて市後の花曇り
桐先り喰積寒き仲の丁
弓追張様もんをみる窓を
夏の月ぬのたきうが浮く居れ
衣の三国の町の鏡千
柄の焦てつきむ秘ある鉄取物抄
桶らも洗道酒の桶を
燕窩よ山塚大和伊賀何内
金的に掃矢の手抱どよあさく
山寄り翠簾あむ店へ薬買
菊華宿トのあるをんてい
三人を手に居きし乃序
うけうをりて馬をり殿
文輝 壽器りりくは食之

月むねのうら
 しくありとめつら
 しく作一うあふ
 言息あり
 買色ハムヨキカ
 武術ハおうミ
 きて武士のハ
 大ミ
 一休李まよわく
 あらわねお
 二月のうら
 職人言人のうら
 病体
 船のうら馬子
 すてて
 下のうら

生菜庵

三夕の海り
 あらび
 好めら
 嫌ひ
 一夕仕立方に
 尤強弱交る
 神釈
 病体
 船のうら
 隅田川
 将きう

綱子
 鞆
 杖
 袴
 大子
 梅
 隣
 一本
 梅
 内の
 黒
 鏡
 唄

百筵一驢

お
 波
 入
 川
 一
 天
 素
 傀
 素
 准
 憲
 是

よき長尺ゆる

立

扇乃ちりし神 樂しきく
辛皮は忘れしき 染し舌の上
作山は一日晴し 入梅乃中
酒は色の米は費ハおひあし
位山トりてハあし ちよあれて
時めく大長依姑もあし
人し果あり年 に果を
形たりきあし山を穿つ事
あし盛んたり 天竺乃道
鮎一ツ獲乃 中々徳し立
菜を一抱罢し ちちる伝る船
片しうめを 後のたき藏
二系しに 居けて迄の世しり
世に女と地 の洞ひ人し害
どのハ似 氣なり 揚唇さし紙
えの糸し 辰る 亡 候

東風菴

拾翠婦野逸

一休和らうき道
定しきるなりゆ
打られと
あきと 互体
世信り
尺巾しきり
うらまはハ
本彩点の趣て
作し

石立 孝て打くの一て菊は 綿
きれそ木目の尺ゆれ 暮夜
戸のさし 金て忘れし 裾金
二着のあ 瓶は飾し 一衣補
立て居し 水く 粒産る 四角力
松糸針 針は 唾唾 後の紫菀
先底斗 公もて 居子 舟
卵卵の 刺は 細の かけさる
基も ちや 櫛の ちるさる
千 磁子 ちち日 ちる ね 裏表
引 裁舟 ち午 時 乃 新
簾 一 ちく 秀し 中 一 巻
鉢 一 ちち ちれ ち 舞の ち系 底
南 船の 妻は 渡り ち 河 風

揚 禍よ夏葉一葉少しの上
 虹の上く〜葉如捨 滝
 葛飾や葉よ春のあら露氷
 空 濁 約く〜 燈よ 穴を 足る
 玉 壺 一 柄の 糸を 一ト〜し
 新 一 硯 湯よ 流 以 端
 捨 けの 生 羨う 一ッ 曲 突の 角
 秤 を 出 けて 漆よ 人 参
 片 以て 八 中らと 突 如す 煙 竹 盆
 瓮 の 中 菓 司の 石よ 冬い 風
 立 っ 強 藤 ちん けう 灰
 弁 如 急の 垣よ 相 波の 行る 白 比
 藤 よ 尋る 人よ 風を 借 けち
 袴 よ〜〜 あ 田 中 中〜 付
 賣 れ〜〜 もる い 物 坐て 表 癖
 傍 の 穴 一〜 壺 屋 の 腐

水鶏奔露川

橋近亭

一 夕 立 卯 彦 建 の ねよ ね 矢 の 面 倉 ぞ
 陰 ち を 夕よ 佛 っ 尻 なら たら
 病 む 母 も 子 の 立 才よ 床 あ け
 我 府 の 薬 あよ 一〜 人 の ため
 佛 門よ へと 悟 氣も 相〜 まで
 世 を 捨よ 莖 少〜 あり 思
 山 寺の 怪よ 一〜 考の 妙 法
 ね 才の 吟 って ちり と 淀の 舟
 ぢ ぶん だを ふん ても いふ 女 人 走
 梅 咲 や お 梅 辰も 銀 世 界
 滋 壺 了 響の こ けれ 雨 う づ 巻て
 氏 士 も 平 等 院の 中 の つ ぶ
 川 ぢ の 又 も 子 考よ 一〜 されて
 銅 佛 の 膝 の 下 一〜 せ ぬ 笑 ぐ

強弱交るへー
 所三句のワ〜
 才一〜とく〜
 とく〜作を〜
 神釈〜
 秋の力大〜
 初樹 田子
 意の夕
 橋 莖
 銅佛 遊 関

琴の輪へ一矢ゆきけりけり
洞佛のおんたのうへと帝も在
標をあびてごぶるうを佛
反魂丹うひのちりをけり
十布丸原の標あけられ
さくらと穀里と席と土の場
疫者くま楊屋標
きくぬ卒都儀と仇るくり出
怪者りし重く習る看痛
足赤むうひあめや骨分々
園所づうく犬の系宮
たしるみるくきぬ丸薬
帆くくち伐く日のうよ山
女ううむとあきまんと山
今ハハ小糸と世を標しる

神川舎

強弱まある
附三々のうらま
ふん丸房印や
がーうまや
あうさうま
神
善
在体
地名

可都見房藻風

あや温徳うけへき月のあま
白桑紙印まもめだ若り
あさけるく教る欄のかき子
けくまん二条新地とうま神
教習もあすい仇め
すすうまや山吹ちり人薬
とこともしるは伯儀いのりま
小夜ふまうくま出まをうち
花も比翼と秋の涼りさ
馬ののあるうきたけとつやま
半はあとするま女も
善くさ紙ひうるまうと
肉とするへき辛と葛
蜂の日ハ目うけくも地りん

神川舎

、何れ舞臺に下りてと纏の粒ひき
、さつりて入んたき 孟（一）迷
、うづれてハ淫（一）多岐の流ひは
、赤目口目と名さく伊勢めく
、古き（一）の書文車はまきつて
、泥（一）も酔（一）ひ田（一）（一）常（一）有（一）る
、鶏（一）子（一）ぬ（一）灰（一）も（一）な（一）り（一）と（一）月（一）此（一）照（一）る
、帆（一）と（一）る（一）る（一）芭（一）蕉（一）家（一）の（一）ま（一）う（一）り（一）
、約（一）（一）お（一）く（一）蕙（一）は（一）夢（一）の（一）お（一）の（一）つ（一）
、根（一）（一）の（一）虹（一）の（一）根（一）（一）（一）照（一）り（一）
、初（一）俣（一）清（一）田（一）極（一）る（一）吸（一）と（一）口（一）癖（一）は
、裾（一）の（一）ほ（一）（一）し（一）は（一）悪（一）を（一）め（一）せ（一）教
、上（一）下（一）も（一）お（一）は（一）あ（一）れ（一）て（一）ハ（一）悪（一）夜
、管（一）弦（一）又（一）さ（一）く（一）雪（一）を（一）う（一）り（一）ぬ
、照（一）り（一）く（一）り（一）と（一）う（一）く（一）ま（一）全（一）の（一）日（一）初（一）せ
、石（一）切（一）ら（一）と（一）心（一）は（一）吸（一）る（一）紫（一）の（一）花

白雄房

附三句のワテ下
も（一）（一）（一）（一）（一）（一）（一）（一）（一）（一）
の（一）と（一）い（一）ち（一）一（一）（一）（一）（一）
吾（一）は（一）用（一）ら（一）ま（一）る（一）具（一）を
よ（一）お（一）る（一）（一）（一）（一）と
源氏物語
伊勢物語
古今つれく升
中（一）て（一）物（一）は（一）あ（一）り（一）
て（一）は（一）ん（一）る（一）（一）
茲（一）は（一）お（一）ち（一）を（一）
る（一）方（一）よ（一）

昨鳥

あやも（一）これ（一）の（一）け（一）ら（一）れ（一）陽（一）を（一）の（一）立
、身（一）風（一）は（一）舞（一）の（一）足（一）元（一）あ（一）や（一）り（一）
、後（一）（一）の（一）粒（一）を（一）流（一）は（一）く（一）す（一）月
、く（一）り（一）ま（一）と（一）教（一）の（一）か（一）き（一）を（一）灯（一）は
、草（一）木（一）深（一）る（一）風（一）吹（一）あ（一）す
、強（一）さ（一）の（一）乱（一）草（一）海（一）は（一）月（一）長（一）さ（一）
、あ（一）熟（一）お（一）く（一）ほ（一）と（一）お（一）（一）（一）（一）
、一（一）つ（一）あ（一）る（一）小（一）粒（一）を（一）呉（一）く（一）酒（一）は（一）ん
、命（一）婦（一）ら（一）ら（一）と（一）ハ（一）越（一）は（一）る（一）
、髪（一）の（一）め（一）て（一）は（一）く（一）と（一）ら（一）う（一）（一）（一）
、情（一）（一）（一）（一）（一）井（一）術（一）の（一）小（一）教（一）を（一）れ（一）る（一）
、う（一）る（一）本（一）投（一）を（一）れ（一）臨（一）幅（一）の（一）う（一）
、新（一）ち（一）く（一）牛（一）の（一）角（一）文（一）を（一）せ（一）
、新（一）（一）（一）（一）切（一）壳（一）ど（一）め

白堂若拙

古ひしうら松の隣を香合よ
軍功者の酒一底なす
ほろけきすは世ハ昔のうり枕
るさぬ糸や何系るを
さきさきをほむはあまの冬
より小くき小竹後う関
才のほろさうく公衆は味ひく
齡うれしき草乃細
一面さうしと泣の照うはく
沢沼のたりの味一金魚
月よほしと海入らる
春の日の味いむれ根う草
帆うけよ波のをけし銘振
第本は賤の啼りのハまら
情をうらぬ迷のりや
おのほとほれとけり梓書

老梅庵

一とわわうき方
三夕のワうき方
うき方うき方
点低一定たる具
もろれとす
水辺 気もすさ
漁獲のゆ ぬる
花おめうすお吉
ありうれたるハ
きよ作

○ 白堂若拙

あや強生半うら
後いしうら 儀う 鯨の腹え
ちらうく 風の光うら
機も事うめぬ女川の流え
善品の品の祝の名とさく
祝むしうらうら 浦ハ魚を
つ子うらうら 花うらうら
るうれと業理の亮のうけ
湯衣の下 髪よとら
折重寺も氣候子大和者
雷ハあちうらうら 木明り
信馬おろしうら 木明り
豆の灯の風うらうら
般若すむうらうら 気遠

江戸地名相州地名
 京橋通 中仙居
 監事の石 江戸の
 夕暮師 世話する
 法善宗門の石は
 芝居のゆきと作
 やうきとす
 古人の陵墓の心え
 一たい作へ

一囊軒

強弱交る通
 三句の口を才一
 俯みすくみたる方
 一石のうもすき
 作へ
 神釈 染物
 実情 権也
 京地名
 巽をすし 窓白
 何れももらん形
 女とりとちあく
 ちとあけり

夕暮師 狐を眼病のち取
 や川と大日一々きぬくの酒
 おくす川と川の流るる
 焼く文ヶおを蓋すらびを
 大華や生干の魚のむけ焼
 荒神 跨馬のよりうる
 釣しあくとらる 信子 女
 沙州 石を枕するさ
 着へ旭のさりぬ高 楠
 菜のむ乃けさや毒の日のあ
 犬の子ねよ 石の石の中
 生を殺せり 藤の二一ぬ焼
 火を傍りよ身く 朔日の礼
 罪作る日と寺の縁 景
 温水の山やかれまよとら

松堂貞祇

おの神の御も 歌お方の忍らん
 五玉ゆゆれを女より 此
 三千年世界 似し親も子
 一人 一人 三人 起るる風
 今川と 有川 藤と 竹うるい
 一角力又勝り多 建 並す
 ちとぬ火の降く ちとぬ親の
 何いと川 赤梅の不自由
 骨折るる 夕 一うほお
 年をとりぬ 大まら 何ゆ
 年をとりぬ 霊祭る 表る

秋柳 山菜玉
ふき 内面母
都の又子
まくてよ

秋風園

一巻の首尾三々乃
ワリ勿漏之附を
前々を足定三三三
うろく又つよき
所もも言長あう
其外ぬらぬハ
秋萩 弓馬
うらみ 人情
軍休
木彩点の心
待くくがーおり

魏華子 破お入く子多打
都 尼の十の斗ハ子のみよ
揚の中一り 本教ら末
瘦る娘一りうさういり附く
様宗 奏事する志賀の片一これ
衣く三玉の町の燈子鳥
千休 苔の石くり梅咲く
た 恭形一りまらぶ山菜玉
地まも 嵐も一巻の人多
後 海を打も海を敷の序
うのめお下戸は戻る年ぬ
母の云葉をきついでうへう
うさうこれを食べ切る禿眼とまて
うさうけし曲を打るものうけん
多 涙の廣 喉おもる
四 條の糸をうへう風く吹く

健堂紅菖

あか六十 越りてモコヤ うち 老
面目 僧玉と一りまろく 下れく
うれりく 一りあまふ 育 子
満うも たる野の勢繩の昏らて
筆 作る言ハくうれて 下り蜘蛛
金的 ひとり川 湖小屋多う 子
嗟 さい川 一り霧の夜多のうらう
寺とる 宗音うらひの 垣 碑
服と廻 一りたる泥 功 一り 灸
軍 一り借 一りて金のなす 寺
やけい 一り海くうれ連れ 一 順
宮 徳の 多をこされて たち ちう

このりくつてまき方
あり

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇

透きぬれ 襦袢 代の駕上 袂の衣
我い止んく 姫 祇まろ 城
こま 大工のこころを 目たつ 栴の泣
死 活の傳し 下 祇 脱く
名のとれぬ 鳥ハ 寿まを 何と ちう
誰 系 ぬけく 飯 祇 琴ノ 船
登り じいん 麻の子の 泣の 死しき
所 住し じいん 眞の 撰り人
夏 義の ありて 一ツも あま
社 中 ちら ぼく 千代り 定信
茶 差の あら ぬけく 遊々 せ
功 言 令 色 少く じいん 頭 坊
ワ せれ じいん 乃ち 近付の ぼ
あも 偏る 其 籠の 古 傘ハ
あ ちう みる 籠し ちう なる 大 巻
丈の ぬき 籠し じいん 眞の 祇

東柿園

附三句のワラキ一
一句の仕立句了
きの不考一
買色 人名
比名 名
世活るノを不何
てもよーとかく
句作あー
句通るあま甲
所仕立一

貞江産岸 貞江

おの 名のて知れら廓如の人
西京より此 新田のをもんく
、名情て花の踊れ囀一
、神代の外れ尾七代
、あーハ新武士の生碑
、此廓ハ夜通姫も末摘を
、跡の家ハ煙りもま新田山
男 正七世 境の 鐘
、世を推し出さる新の
ちとれ多ふ夜うせ 山
脊中 合せも物くか
洗小根芥ハ実盛らう 聲
吾口も尻理 至生の入聲
踊舞の置えの吟 枯、声

東林園

あまのわひの筑紫琴弓秋味し
岩をくぐりぬく 武彦 月か
ほひと月を寝 平に控 手履
万葉の巻 くる柱を根つさあ
梅さく 上く 市の系季
立ぬ ぬか ぬか ぬか ぬか ぬか
くらり 田の中 廊の秋はるし
木馬の鞍 八あ ぶら ぶら
聖々よ 死をく 可く 何 給け
かいて ちき ちき ちき ちき ちき
初今 今の床 ぬら ぬら ぬら
正学 坊の甲 たらん せら 日
傘 持て たら は 目 たら たら 水
か たら たら たら たら たら たら
きり 人の 鷹 天の 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹

吾民菴

田 貞和

附才一上地名よし
畚のさま
雑語
諺と傳う ころ白
よ へい へい へい へい
余ハ是をそるるし

ハッロ へい へい へい へい
着葉も 衰に 蝕の 只中
機織い くら 抱く 誇り 司
笑ふと 吹矢 息を 座か 尺
お玉 くら 高物 山へ 着く 船
又 くら 玉主 くら 風の 吹ひ 周
笠 魚の 切 佐 持 くら くら 梅
引 明細 くら くら 堂の 香
粉 糠の 面を 汚す 馬の子
名 養の 少 くら くら くら くら
女 房き くら くら 人の 月め くら
以 妬 くら くら 古 郷の くら くら
甚 帯の 菘 くら くら 梅の 南 枝 梅
漕 竿も くら くら 流の 竹 枝

〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇

北齋

〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇

灯へ航の事、祈の事、極
百日江、よ、光る事、あ、ら
了、も病む、由を、食の、あ、ら、骨
長壽の、隔の、眉も、ゆ、い、さ、う
志、く、も、三、子、の、輕、ひ、産、夢、う
舟、か、り、く、く、と、尾、を、完、く、き、う
礎、て、く、女、房、を、呵、る、小、枕
拵、と、木、馬、よ、大、工、家、て、ん、る
り、く、日、け、の、長、ひ、女、の、門、邊、ひ
あ、り、く、く、と、眼、を、ぬ、て、行、き、の、寫
齒、と、條、て、く、行、岩、本、の、歌、解
類、ふ、く、く、く、く、教、む、口、口、口
仙、よ、む、と、く、く、き、松、く、長、髪
繁、の、解、と、ん、る、鏡、を、ん、や、り
古、瘡、を、ん、る、鏡、を、ん、や、り
い、ろ、く、く、か、飛、り、く、こ、こ、す、め、の、反、り

味岡貞峨

〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇
〇 〇 〇

大崎日の留まらぬ曲ちとりの
 作道の振ると喜のせらる様
 半居一三反身てんそ外竜梅
 亡八の卞和突ゆーめ玉
 くら川を流る八井の内め船
 工面 面壁 善法め 系年
 冬枯の極小町う方の終り
 古井一の陸まらるると知る
 煙糸の小指も既と百あ
 貸 失ひ 幻乃毫
 翁てもり 系中 善の尊
 四睡 平 這入るよる新造
 握系 ち一 二反の巾 極系
 又 居 筆と 年 居 續
 楠 さくも 思 系 正ら 貞
 三 浦 の 女 二 反 の 巾 居

信夫巢

信弱子かろそん
附了り考一た
此流以ハあれせ
あこ子かろそん
る一説白と尺合
セ考る一

西

徒流

前々法 輪を西へ通せハ若菜畑
針代子いりり 啼くうらみす
不二此言解も川の隈と縁
公家系り吟よても中より五文と
禁り時子えちりと剣る松ふく
言と之とれ子あきらまの 傘
時雨返りの 檀の浦 風
志中れ、て信子戻る人の骨
毎々あつて 流槌の怪系
舟楫とて、ハ子い故かや
園圃の露子一口を岩をた
多事あつて、親の代と位
一月魚の塩たあつて夕飯を
五月西菜日浮さるるを家

信夫巢

かまひ
おれは
おれは
おれは

小佛一峰二へくた馬
梢くく軍アておるおれお
一象遠きやとて人もおる
三のちよ啼く家と賣お
一人僕れ君と大平と扱
弱きハ多敷き玉おる
一人もおかしくやと坪る犬の骨
小町思へハ意ハせま一
一踏舞あせて也れ遠度
牢奥よえうなき音とめ鳥
一遠き様おれも更け
ふ年字事ハ妙極畠も疾の疾
一我れ中さくお此世より
舞の扇れほ袖平遠歌
一川し一橋りおれハ多く能
評ちの薩れ教る一子持

奇之菴 正風袴 慶 紀逸

附りりおる
下此句そ尺合
句他ある

前句ぬらんの下子等
業法もちよと一象病家帳
一扇子のメ乃老れ建つけ
一元日ハ第そぬも妻乃式
一大小のむつおら家必境
一り垂く朱の事を取
一其述と父その事母
一受れくこゆれも縁もあ
一夏おる本曾の山中風多
一後世をきけハあちち換抄
一長くたけくゆれ運受
一泥坊もこちよ物の阿く
一麦ハ極子出く赤く乾啼
一安く位む地をくらぬ色ハ

この巻の
かたは
かたは

四時樓

蕉門枝流

榎阪夜梧

一 袴子子こころ 草むしりの中
 一 天地乃 志とたどる物八草
 一 障子の 春を 露乃 乾風
 一 調合子 初らあや 中々 嘆を
 一 腰うけて 髪結 床乃 代り合
 一 双盤 張く 子れ 初く 平痘
 一 踊り 遠く 付い け おふ け
 一 それと なく 海の 約束 北男 けり
 一 たの 一もと 尺一 苦も 樂も 業門
 一 欠と けり 川を 懸 苔乃 土 子
 一 女有り けり けり 砂子 二返と 出け
 一 仇云 志月 扱子 けり けり けり
 一 尺あ たる 糸を けり けり 乃 縁
 一 冬子 冬 けり 天竺 乃 山
 大木 乃 星さ けり 枝乃 枝

十九扁子多と

近身志海及地名

鎌倉名所

徳 桑句

尺月よりハ何も

尺合考

尺合 歡の 森の 尺居 饒の 丈欠

一 以日ハ 般 病の 妙法も 存ら けり
 一 親を 孫 けり と 懸 壺 柴
 一 袴の 尺 けり 女房の なく
 一 立 懸 花夕 けり けり 片折 戸
 一 評 柱の 松の けり 塗 草 筒
 一 母 身 けり けり 離 けり 金
 一 一 思 東 けり 格 乃 中
 一 一 老 けり けり けり けり けり
 一 所 一 春 八 けり と 親 世 けり
 一 一 畫 踏 一 日 けり けり 袋

新編

碎醒子少川と歡る玉もけり
 阿婆と人の子ハ朔乃
 散うく子花面かき夕乃
 揚屋葛蔭も菓を運よ
 市販医の尺舞十日に一夜宛
 まくり川より寶永乃犬
 勘七と鬼玉の細屋
 箱根一地球極樂八温泉場
 扶桑まて馬ふ赤ハ名義
 雪細工物造世の玉たも
 世を漕人子四十二の灘
 次風を角あそびのさし
 たるさく扱てぬる玉川
 暖の柔さを研る亭は梅
 一々枯ぬ舟中の町乃に戸持り
 佛肝の膝上を檀の

幻之齋

三句のぼり走一
おておひ
もたれは起
しる付
新奇の作り
も点あり
生れ 極お
吾考 秋
軽き句も
何より
御意阿る社立
又も物あり

擗立 千束其血

関守ハ元負けもせん
英人への 倭 義が似
小金井へは 元ハをいふ
言い 齒 牙 古 主 れ 恩 と 嚙 分 人
禪 さやそ 人 心 物 物
あも 井 心 一 人 老 々
湯がたふらと 極の枝あり
漆 釘 の お れ も 交 互 せ 足 の 交
小 禍 立 鶏 卵 と 舌 舌 の 舌 舌
鬼ハ糸の 時 格 あり 舌 舌 舌
守カ歌を 撰 てる 中 食
取 是 の 禿 何 心 沢 舌 舌
板 裂 く 時 名 樹 心 切 舌 舌
舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌

新編

衣玉庵

三句目より付
才一
源氏 伊勢
酒の合 おうと
以塗

醉卧

あ白達て二夕々々 杉白く梅う香
鼻息も指 至く例は氣を垂て
、玉をくくく 惚しき鐘の音
、茶飲せき 夜伽居 咎 侍
、玉桐を 十六日ハ名く
、出つ之を 控し何雀の過 夏
、齒さし 入齒の具合 齒を
、針も茶も 清く如 疾
、尺 おくく ぬ梅お 系も又 舌
、長 松 乃 似合 山 伏
、山くも け面 彼面は 守りて
、宋 画 明 壘を 掛くも てる
、頂 戸の 舌 嚙く 明石 可 寄
、躑 了 平 家 在 海 亦 乃 夏

(Faint bleed-through text from the reverse side)

庭の元 服の技 結いおこ
礼礼を 芋でとろろ 梅が下
簑の尻 何とこら 下 簑 賣
俵 平 是の 生 入る 夕 立
白羽の ともよ 二夕 百 折 新
た ぬ 日 毎 一 火 屋 の 香 鐘
繫い 玉 けを 眠る 後 足
霸王 村 平 接ぶ 尺 せ ち ち ち
猫 多 子 位 平 養 ち 尋 南
劫 尚 の 庵 熙 字 典 也 流 一 り
出 合 の 才 二 月 子 人 と 成
了 然 平 勝 つ ぶ 人 袴 牛
北 系 流 の ち ち ち 人 品
お 荒 片 一 合 一 や す め 弦
ま 婦 一 梅 子 子 の 羽 試 持 っ
大 花 が 出 一 ち ち ち ち ち

山里も暮れ交る橋時
 恨の打子藤多響
 孝ほろくくと荒し細く
 鼓打扇らを舞ち汁し
 慈葛は根根も言の沙室ち
 吉枝の肉裏供所へ汲む
 子鳥吹込乃洞口
 生佛の声似も跡る琵琶は
 生佛の声似も跡る琵琶は
 十の十糸の響りし
 衣を白くしと明跡る
 曲るさほり合くる
 南よとけぬ極の痘切
 辰橋を祀りて

雨夜菴

三石の波り付赤く
 左としくれを一切
 ありされども追
 以のぬき去るとん
 多くハ
 多辺 蔓中
 鎌倉の子
 宇治物語
 著聞集ふとふま
 するふす
 とかくかろみんか
 の付より点り

申長者龜成

おや切さすちりて
 二牧つる多藤芝のうら合を
 吾妻の杜の懺ふく
 田の畔は啼のがれく松の苗
 踏海子居よりさる糸り
 多屋の門は夏乃水
 機子の花まき通系夏衣
 机のうら合泥乃
 出茶屋もらん屯一里松
 勤うら子のもれさる石地
 京は居たなりあり古
 捨りあくと歯あそ月砂
 列莊の居たり筑波都
 高瀬一たい瓦やく松

淡路の山 互に祈
心のおうー

松聲庵

影る十九編し海
赤いしとくくはれ
赤いしとくくはれ
う仕立へ
系摘 瓜坊
粥状 石生乳
鷹 膏
神歌 栞物
山 互に祈
心のおうー

和の田一へおし川と一日
梅くらりりりひくく大鐘
元船を舟くくくある喜ぬ人
くくくくと列きのくくく時
荷鞍は逆さ物の齒梳桶
山ふか〜笑の多の筆とまら
坊の竈 一 児の鉄 漿
まらふ日もなきあ神の宮
ほ中一團く〜か〜む松の蔓
概さく〜ころ〜 逆さひゆ年
集て居る田楽串の〜と〜
・殉者の人のこ〜 居る石
をほよ〜れ〜に堂の清通り
・山目んへ〜と〜を〜る〜
瓜の皮むく〜と〜の曲

和 一 徑

赤いしとくくはれ
緒付て二文の役は立ぬ 篠
・是近 笑ひの巻 注 八阿れ
若い時 死をこ〜けて行手ゆら
・女の夢 耳 一 を 響く
物の氣の集る時ハ 燈もなり付
・勝茶 盆 一 灯の 産
泳うハ 遊女の果と云ッれま
・下 早くも 篠ハ 融色く交物
木像と打ら 夫仏の木乃 救多
・山 一ツ 裾 一 打して 木子平
・天 留 一 各 虫のさく 糸 一 袋
机 又 糸 一 留 一 られて 居る

累日菴

付三勺れりうハ
勿論二勺のり
糲一面白付
る白又尺物付
子点り

葛飾素丸

石立 鱧の才は四の唐松透海り
行 仮名て去て海む字のカステイラ
そ 汁の汁 蟹の汁や 大 鯉
陽 石の何色ハ菜も女郎花
其 瑞の菰の丸い撲 白
曇 和云りの人をして泣くせり
吹 井の末も田へ海も云地
鴨 考何 泣の田は中れる星

前々 あれと我らより何れさきよきて口
小 指て撰て 洞合 紙 尺 紙
瓜 先て世を 樂子位む生田流
系 刺 玉と白ハ 麦湯 砂粉湯
、 卦 形も中何て 蝶の居風呂
、 庵下も寺へ 遣ひ人も又よる
、 倉 子より 何ぞ魚川も又よる
、 くらり 上りても 芥は 芥
、 強 石もつら 運のよかきと 皆
、 撰 け 採いても ねらうる 炭
、 先 門か 旅 籠屋も
、 か 田 疋ま 心も 心も
、 藪 藪 和 尚の 夢の 一物
、 くら ば 八 塔 七 七 此 作 の 子

農日録
...
...

北冥舎

強和世子よ
付りしりり
越後地名
茶車 黄色
麻中故人名
牡丹 芍薬
酒 鷹
余ハ白中尺合
魚

女はうり弓剪筋を若子甲の
控しきし身の内子後正
七夕の家毎の竹の綿して
長以城下北中子後一場
云千友のきし蓋よあし
親達ハ言妙町よ老乃松
法氣成勢乃むく拍子
智恵の輪とむらねいてハ
徳も徳八十の笑とも後ふハ
ハ米橋の港北先生
云理子孫うして住舞ハ生破
氣ハ長しおれてるきハ流遠ん
むらねい耶とありしとのさ
かさん子よ日の透るる中
仇討て花のか塔乃智乃言
不斗し事り元日の式

内 魚堂

突如しハ粧ひぬく牡丹
突出ハ不表城中の鎧
凱陣を賀も鷹もむき
真此油干浮く花
施茶の派と潤む魚
珍虫ハ若者季以ハ
鷹鷹空子ぬりる
面向不背天北富士
面向不背玉葉う品
牡丹ハと号ハ朝の扉の
夏極散や下枝下放き鷹
女房ハ火燵斗の脉と膝の上
武士の尾とちと尺を
極後る神鷹百足の遠を

...

公宴會
...
...
...

所摩子荒る巻く葉の世
返葉の後後生海苔と曠
豆中一編付ゆん柏葉
引ケく明る手多そや竹焼
苜蓿の瘦牡丹うらうら
條付子花袖添き海の中
三浦屋子尾花り留ま草
片く袖子尾花り猫
孟く喰ふ廊の初
生碎舟の垢一漂若
赤ハ志んと文る圃子葉立出
鶏あもて徳子加田の起別色
前白た刀拵ハ穿へる中子欠く
程ハ言井と熊野を足送る
、薩倉と大和鳥りの足す
魚葱 燗り 松子一トをド

皓蓮社

紀了阿

付リ了了一
一勾の調いまめ
くぬぬまて
物くす口
とそれとろく付
一
秋夜立句
平常人地
山形海
め了了了
あさき名
そあけ了

前曲突撃て未をととく味喰の
一長 伯子 浪田乃管 見
一 笹子 りえさ 火縄一寸
七丈ちくくひれ 足と引る
一 武士れ上も 衣ハ切る
一 軽々ぬ 罪物 くるも
一 又 禊々 鳥山乃 味
ひよんの突ハ鳥もとく秋分
一 托 跡子 志くぬ 玉とる
一 度 へづれ 徳ッ 音 二
一 あり 志バ ぐきハ 幸 幸
一 細 あり 寸 阿 清の 浦と 我 志と
一 ぶろ 一 志 界と 包 日 祥 天 儀
一 拍 奏 下 の む 先生 乃 く 也

...
...

すんでいへる言り
すう言点あり
月花の白麻ホ
他へへへへ

いなき死

強弱くくくく
言点あり
旅軒 在作
軍体 雲上
玄句
江戸地名
をくくく

日吉大夫乃日子くらむむ
笑ちち内をやうくきき
おれりろく海子らやうく
まろくく人乃かりる
睡さくおふお子
物うはらおき
吹ぬ日も三浦岬の波は
殺乃後くく太刀う
隣てくすら後あ
切板子ぞらく生板草
織子月此の法
端あ乃あ寸の
出黄取中
控乃
後世
とく丹波の鉾山乃

千秋

初句
火桶子けむる小野の山
七里はりて
やとれはは
望ル
神
小
おの
か
花
石
坊

江戸地名

山童 凡く...
白子 有り...
波うち 除子 組うち...
笛す 子 誰う 青乃 君
一 抱子 備山 山を 凡く 仰く
一 乳飲子 乳子 病人の せハ
故き 火も 室の ハ等 乃夕 煙
此 交の ある 子 づけて さい 子
ある 日 以と 子 傍れ 力の 上

昨非弁

才一付 三右の 子...
人 名地名 八和 傳イ
及不...
らハ 水 莖 名 伝 考
う や...
妙 妙 妙...
朽 朽...
一 一...
作...
付...
を 二...
何)

溪利牛

巨 燧 一 是 出...
神...
生 立...
大 悟...
怪...
為...
医...
初...
室...
海...

行々

人情 軍作
 恩芭 子ノ句
 兼及石 桂抄
 兼及石 世活見
 計歌 地名伊豆
 相持 地名伊豆
 仁戸地名 兼及石
 兼及地名 兼及石
 余ハ句中尺人合

一及の戸を叩て打火子啼君知考
 子ハト一系と中一にま公
 裏店のちひひみへさ月夜
 路くくくく送る火の灰
 悔風子戦く志者の系林
 質子名おうぬ五部を侍り高
 一与呵トとくくを魂柄一礼
 歌くえんくひ女梨子壹
 乃珠の羞ハアぬ市印を侍
 卯月九日祝迎をテ了寺
 山をよぢく菊おの侍士
 さらまき度れとるうめさく
 羞の月表を三浦やう察
 西月晴朝を海鳥の風吹
 侍の板とるをろの
 極寺をゆる三浦九郎次

星運堂訓書川 東叡山山谷川 花屋久次郎

誹諧雜

四季發句帳

家辨見種

雲門加判

北薄昔昔川

多老結津句地

全後編 全上

一枝筆

全後編 全上

全後編 全上

遠筑波

〇辨書川

古来庵句集 有藏
後句

野槌 有藏
後句

初鴉 有藏
高直頭書附
風有撰

櫻台十二歌仙 有藏
高直頭書附

ぬさく〜 有藏

飾墨 有藏
高直頭書附

日〜 有藏

かき野 有藏

ふき〜 有藏

古来庵句集 有藏

長き口 有藏

仁義見 有藏

春〜 有藏

春〜 有藏

柳林 柳林
川端 川端
代集 代集

雙後路談 有藏
其用坐宗近ノ遺像并
後句

吾妻 有藏
其用坐高直集

野々錦 有藏
吉門高直句集

雙喜會儀 有藏
在轉催千句編評
高直句

志の〜 有藏
徳高直
句集

杵音問答 有藏
其用坐本
訓論書

ハ〜 有藏
江戸平高直
退任著

俳諧草薦 有藏
平砂側
十歌仙

附台高直部類 有藏
古平心撰

樓川句集 有藏
編口撰

田女句集 有藏
上同

買明句集 有藏
其用坐本
也刻

俳諧平河 有藏
末邊撰
不吉高直

俳諧月

正目 俳諧得道解

寬永著

俳諧百集

山田著

鶏口發句集

同列
句帳

松川

編

きりふり

編

西判月並句集

北化鳥合

空馬撰
十二歌仙

才營發句集

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

下七

空馬撰

空馬撰

空馬撰

綾錦魚

初編 空馬撰

全後編 空馬撰

訓風州傳

川何

初編 空馬撰

柳樽拾遺

改著

初編 空馬撰

全末摘花

今人

初編 空馬撰

万句抄

平仲宗近

俳諧百人句

空馬撰

江戸四天王

初編 空馬撰

燕志月並發句集

若眼鏡

開道貝

兼翁渡唐之像

俳諧百十草

文來卷

同折花集

江戶

同如是俳

在轉宗卷
蕉翁百選追憶

同十人俳諧

卷

遊覽志

蘇島守高著
山城遊覽地名古歌
古人發句

山中以山人

後集

山東遊覽志

昌作著
鎌倉金沢江島三浦編根温泉元
寄古歌并古人發句

近在所名集

武江近在之限、人東海
鎌倉京近在流行所

全核記

礎

漁著
當時流行更更
五之字、五之字

增補俳諧

百合花

...

...

俳諧二冊子

石山著
石徳半歌仙

百十鳥

園文發句
高判

同上里獨歩

素綾著
俳諧書記
自然自得ス也

同年代記

素綾著
細記

同器新集

得器宗市
高判

同後編

全上
三篇編出

又桑林

岩松著
歌仙發句

俳諧菅茅野

千砂著
聖廟御年甲集

俳諧五萬戈

得器著
五萬の高度

二見浮文臺記

南山著
...

か山徳の核

南山著
...

○靈門俳書類目錄

俳諧句抄紙

牛心著
画入發句

同被萃

俳諧句抄紙
画入發句

靈門發句帳

列之著

靈門

俳諧句抄紙

一陽片素外先生著

鷄談窓藏

梅翁發句集

類句辨

右ノヨリ類句ヲ並テ
見發キマウニセシセ
ノカ

江戸川

是上善孤取ノ句
前句一ノ具徳波川
做ニ素外中敷ノ州句也

五色梅

素外連中梅題發句

素外拍掌子句

兼佩席々取ノ州句ヲヒビ
素外ノ句ニテ續リテノトナセル也

一物連歌

宝了素外俳諧五言七言
得念同季同地トナリ
吾格吟云々

古今七夕發句集

ヒツノ色紙
八ノ書ノハキ
ノカ

紀行春集

素外東海道
付来ノ筆地

天狗

俳諧句抄紙
ノカ

手毎花

陽井評物
高貞

百貫槌

俳諧句抄紙
ノカ

